

夕間暮れ 家郷へモドル 赤とんぼ

◆作者の思い

両親の反対をうけながらも都会へ出て行って仕事を始めたが、仕事に慣れなく毎日悩んで過ごしていた。時間がたつ事につけ故郷が愛しくなっていた。休みの日、遠く離れた故郷へ戻ろうと列車に乗った。故郷に近づくと、夕日や山や畑が多くなってきて、たくさんとんぼが飛んでいく。夕日で赤く染まるたんぼを見ながら、とんぼの様に空を飛んではやく両親に会いに行きたいと思った。「モドル」にしたのは、一度は出て行ったものの愛しい故郷へ帰りたいと思ったから。「帰る」だと、両親に「いつてらっしゃい」と言われ帰ってきて「ただいま」という感じに思えたので「モドル」にした。カタカナの方が印象が強くなると思った。

虫籠に 父の奮闘 集まりぬ

◆作者の思い

お盆など、我が子だけではなく、大勢の子どもが集まる時期、父ははりきって虫とりに行く。三十分ほどたって父が帰ってくると、父の持つ虫籠の中には、かぶと虫など、沢山の虫が入っている。子どもたちは、それを見てとても喜び、父だけでなく周りの大人たちも思わず笑顔になってしまう。そうして、また来年もとうとう父のやる気につながる。

夏空に 悲しく響く ホイッスル

◆作者の思い

サッカーの中学生連での準決勝で負けた時の事を書きました。あの時は、とても悔しくて、終了を告げるホイッスルが自分たちの2年間してきたサッカーが終わったというのを表現しました。あの時の悔しさをこの俳句に込めました。とても悲しく、ピッチに負けて悔しく項垂れる姿を書きました。

卒業や 筒持ちちける手 涙雨

◆作者の思い

あつという間に卒業式を終え、家にとぼとぼ一人で帰っている。皆の前では泣かなかったが、ぼつりぼつりと降る雨を見て、ゆっくりと寂しく、不安な気持ちでいる。小学校の卒業式では不安より楽しみや期待の方が大きかった。しかし、中学三年生になり、高校での生活に不安や、長く一緒にいた友人との別れがとても寂しい自分がある。そんな気持ちの中で卒業式という場面を想像して歌った。友人と涙を流し抱き合う人たちや、いつも通りの表情でいるけど本当は寂しいと感じている人など、卒業式でのそれぞれの気持ちを考えた。

青春を すべてかけるや 甲子園

◆作者の思い

高校三年間の青春をすべて野球にかける人たちの様子を詠みました。授業で見たDVDで高校は三年間あるので、甲子園に出る機会には三回あるけど、実際出場できるのはたった一回だけと知りました。三年間の練習を、たった一度の試合にかけるので、「すべてかける」と書きました。「甲子園」を最後にもってこくことで、俳句がひきしまり、そして、この俳句が甲子園のことだと、読み手の頭にうえつけられると思いました。だから、この順番でこの言葉をつかい、完成させました。

涼風が 数式めぐりたる闇夜

◆作者の思い

夏の終わりごろ、自分の勉強部屋で、暑いので窓を開けて数学の勉強をしていた。すると、いつの間にか夜になっていた。
ずいぶん涼しくなった夜。涼しい風が部屋に入り込んで、数式でいっぱいなのートをめぐり、まるで、涼風が勉強をしているようだった。今までずっと暑い中勉強していたが、だいぶ涼しくなると、勉強がはかどるようになり、受験勉強に精が出る。

さあかえろ 家でまってる おでんたち

◆作者の思い

仕事が終わって会社を出て、家に帰ろうかとしたときに夜ごはんを思い出して、今日の夜ごはんは、おでんだったと思い、おでんたちが家で待ってるぞ、こんな寒い日におでんでよかったですと思いつきながら帰っている様子からこの俳句を作りました。
おでんは、帰ってくる人においしく食べてほしいと思いつきながら家で待っている様子を表して俳句にしました。

天の川 夜空を見上げ 君想ふ

◆作者の思い

天の川は、彦星と織姫が出会う7月7日の七夕の日、夜空にできるものことです。この俳句は、人によって恋や友情などにもとらえる事ができますが、私は恋について考えました。
情景は、ずっと幼なじみでいつも一緒にいた女の子が急に親の事情で県外に引っ越して、男女2人が離れ離れになります。そして、2人だけの秘密の山の丘のてっぺんで、男の子が幼なじみに対する恋心に気づくという情景です。幼なじみに対して恋心を持っていると気づいた男の子が、女の子が引っ越すまで毎年一緒に見ていた天の川を見て「いつ会えるかな・・・」「早くあいたい・・・」という気持ちを持った俳句です。

秋澄みし 深呼吸して 「好きでした」

◆作者の思い

ずっと好きだった人に思いを伝えるとき、自然がそれを聞くかのように澄んだ大気になった。そこで緊張する心を落ち着けるため深呼吸して伝えるという純粋な少女の姿を想像して句を詠みました。
告白したのは男の人か女の人か、その後の返事はどうなったのかという人々が想像できるようにしました。なぜ季節を秋にしたのかは、いつも夏や冬などが恋の歌で季語として登場していることが多いと思ったので秋の恋の歌を詠んでみたいと思ったからです。